

六花

月刊俳句雑誌りっか
chairman yamada rokko
secondary chairman &
the editor in chief kotori
designed by little bird

10月号

2008

輪

山田六甲

あ 四阿の猫毛づくろふ月夜かな
し 不知火のごとき島より寝待月
び 瓶に紙入れてありけり月の浜
き 絹ごしのごとくに月の上り来し
の 野ざらしに伏せられし舟望の月
や 山の田の水音細く望の月
ま 間違へて声掛けにけり初月夜
ど 泥こねて月見団子と供へけり
り 隣人の内職の音居待月
の 野荒らしの鹿追ふ声や十七夜
を 尾を立てて子を負ふ猿や良夜なる
の のつけから月見の酒杯取らさるる
し 潮満つる舟屋の舟に月の影

だ 抱きしむる 蕪村ぶそんの石へ 須磨の月
り 臨月の犬の遠吠 宵月よいづき夜
を 女の手頬撫なづるかに 月包む
の 野点のだてがさ傘傾いてをり月の宴えん
な 流れゆく流れくる雲無むげつ月なる
が 臥龍がりようまつ松支ささふる棒も月の中
な 縄電車解かれ夕月ゆうづき上り初む
が 蛾は翅はねをば たつかせ みて月澄めり
し 潮騒しおさいを眼がんか下に 須磨の月愛めづる
よ 夜の更けて 湿り帯び 来し二十日月
を 尾を持てる鳥よ 獣けものよ 満月ぞ
ひ 肘ひじついて 月の光に 浸ひたりけり
と 灯ともさざる 燭しよくを 囲みて 月の宴

ことり

あ あぢさみの枯れ並ぶ山冷まじき
し 新聞を繰るたびに音秋暑なる
び 塚の罅なぞりつづける夜長かな
き 金色の香を放つなり榎櫃の実
の 昇りゆく鳥へ秋思をゆだねけり
や 八つ橋に秋風聴いてをりにけり
ま 窓に顔映し見つむる夜長かな
ど どつかりと榎櫃の実りをりにけり
り 綸子着て秋日に白蛇めかむとす
の 遺されし者に秋天広ごれり

を 折おり々おりの色を果たして稲刈らる
の 飲むほどに澄む水澄んでゆきにけり
し しめやかに女身にょしんしなれる夜長かな
だ 脱衣籠だついかごのぞかば秋の守宮やもりをり
り りるりり虫の音真似てくちずさむ
を をみなへし朝露湛たたへをりにけり
の 飲屋より出づや月光注そそがるる
な 泣くたびに大きくなる児秋あき闌たくる
が 硝子がらすよりなほ透き通り虫の音は
な 名を呼ばれ靴紐くつひもきつく運動会

楠若葉月の光に黒ずめり

松本文一郎

初夏や一年生は大人びし

楠若葉鳥居を越えて大空へ

梅雨晴間椎しいはベンチの母の胸

若鮎なりの釣られし形なりに焼かれけり

くすわかばつきのひかりにくろずめり

若葉の概念を打ち破った。月の光に黒ずむという感覚が鋭い。もちろん月の光に黒ずむのは楠に限らないが、特に楠はそう感じさせる。楠の特徴である葉の厚みやこまごまとした重なるの形状を上く言い当てている。掲句の影響で、今後、若葉の季節になる度に月の夜に楠の様子を見に出かけることになりそうだ。そのように人の行動を起こさせるほどに力がある句。

山藤へ束の間瀬より光かな

久永 つう

懐ふとこころの深き谷なり時ほととぎす鳥

五月晴帰らばすぐに夕支度

薫風くくんぷうやどの教室も窓開けて

埋もれ咲く母子草ははこぐさへと日の恵み

やまふじへつかのませよりひかりかな

正統派的写生句。山藤の咲いている場所の情景をよく捉えている。この山藤が咲いているのは木々に囲まれて鬱蒼とした場所であ、川の側。そこへ川から反射した日の光が山藤を浮かび上がらせる。しかもその光も束の間であるというのだから、谷間の日光があまり当たらない場所だと判る。当に一日の中の限られた時間なのである。「束の間」という言葉が効果的。

ワツシワシと青天貪る蟬の声

田尻 勝子

手花火に見知らぬ庭が現れる

高速に乗れば花火の上がりけり

熱湯に落とせし蛸エビコの立ち上がる

筧ざる目より大蛸の足動き出る

わっしわしとせいてんむさぼるせみのこえ

田尻さんの句、という他にない。ワツシワシは熊蟬の鳴き声を独自の聴覚で聞き成した擬音。又、蟬の鳴き声は祭が最高潮に達した状態を彷彿とさせる。晴天を貪るという表現が「ワツシワシ」に畳み掛けるように被さり、雑音を増幅させる。また炎暑の青天を人間が蟬に奪い取られていいるようなSF的錯覚を起こさせるほど迫力と説得力がある。ボール球を場外ホームランしてくれたような作品。

鮎の川

笹村 政子

朝あさ凧なぎや湾わんを占しめたる山の影
 網繕はふだし足の指さを使ひひつつ
 夏霧なつの湖うみを攻うめ来きる迅はやさかな
 解禁かいの四よ五ご日にち過すぎし鮎あの川
 鮎釣あの膝ひざやはらかく川がに入る

蛸狩

水谷ひさ江

みほとりの霽もやにしみだす草蛸くさぼたる
 杉のこだち巨人ののごとし蛸狩
 闇のまとひ蛸につかれぬたるなり
 蛸待のつ闇にさしだす手の熱あつき
 口をあけて蛸の霰しずくうけてをり

六花集

六甲選

松本蓉子

箱詰の桃の匂へる納屋なやに入る
格別のことなき一日西瓜すいか食む
二階より昔は見えし揚あげ花はな火び
大輪の菊の花火を見とどけし
暗闇に花火師の影走りけり

菊谷 潔

五月雨さみだれに木々つれだちてしとどかな
実をつけて雨のおもたき柿かき若葉わかば
紫陽花あじさいの変化の果てに切られけり
木をうちてきつつき示す高みかな
木下こした闇やみ蝉せみは梢こずえの風めざす